

令和7年度 第1回熊本市小中一貫教育懇談会議事録

日時：令和7年(2025年)7月22日(火)

15:00~16:30

場所：熊本市教育センター 第2研修室

○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会事務局あいさつ（楳木課長）
- 3 自己紹介
- 4 座長について
- 5 協議
 - (1) 座長より 小中一貫教育懇談会について
 - (2) 事務局説明 今後の小中一貫教育及び小中連携教育の取組（概要）について
 - (3) 意見交換 (2)についての意見交換

寺前教育審議員（指導課）	4 座長について 座長については今年度も九州ルーテル学院大学の岡村准教授にお願いしたいと思う。よろしいか。 (委員からの異議なし)
寺前教育審議員	座長が決まったので議事に入る。ここから司会を岡村座長にお願いする。
坂本指導主事（指導課）	5 (2) 事務局説明 本市は中学校区の実態が大きく3つのグループに分けている。Aグループは1つの小学校から1つの中学校に進学する中学校区のグループ、Bグループは複数の小学校から1つの中学校に進学する中学校区のグループである。令和7年4月に新たにBグループの4中学校区が小中一貫校となったことでA・Bグループの全てが小中一貫校となった。一方、Cグループは1つの小学校から複数の中学校に分かれて進学する中学校区のグループである。こちらが各グループと中学校区別学校一覧である。Cグループについては、小学校から複数の中学校へ進学するが、基本的に進学者数が多い中学校区への割り振りをしている。A・Bグループでは小中一貫教育と幼小中連携教育を、Cグループでは幼小中連携教育に取り組んでいる。この一覧表をもとに年に3回、中学校区別の「幼小中連携の日」の活動にも取り組んでいる。各中学校区で実態や課題は異なるので、それぞれの校区に合わせた取組が行われている。 これは、A・Bグループの小中一貫校への移行に関する表である。これまでモデル校として1年間取り組んでいただき、小中一貫校に移行してきた。令和6年度にモデル校だった三和中学校区、武蔵中学校区、長嶺中学校区、龍田中学校区が令和7年度4月から小中一貫校になったことで、A・Bグループの全てが小中一貫校になり、節目を迎えることになった。これまではモデル校から小中一貫校に移行する中で、教育委員会が支援を行ってきたが、これからは各学校が主体的に取組を進めていく、つまり各学校が自走していく段階へ来ていると考える。 今後各学校が自走していくために、教育委員会として支援する取組案を考えてみた。 ①小中一貫教育や幼小中連携の担当者用の手引書の作成 ②幼小中連携の日の実施記録の改訂 ③事例紹介方法の検討

④各種助言・支援

の4項目である。この①～④について詳しい案を説明する。

①の担当者用の手引書については、小中一貫教育や幼小中連携の担当者向けになる。新しく担当者になられた方が最初に読んでいただくことを想定している。担当者としての年間の動きの例や参考となる資料の紹介も入れたいと思う。必要なときにいつでも見直せるように、完成したものは校務支援システムのグループウェアキャビネットに保存したいと考えている。

②の「幼小中連携の日」実施記録の改訂については、A・Bグループ（小中一貫校）用とCグループ用を作成したいと考えている。改訂にあたり、これまでは幼小中連携の日の実施内容の記述のみになっていたが、小中一貫教育や幼小中連携について全体的な記述や振り返りができる様式にしたい。各中学校区で課題に対する取組は異なるので、それに応じた独自の評価指標を入れるようにすると、取組の結果が見える化され、次年度への取組へつながっていくと考えている。

こちらがA・Bグループ用とCグループ用の様式案（項目のみ）になる。A・Bグループ用の題名は「小中一貫教育及び幼小中連携に関する実施記録」、Cグループは「幼小中連携に関する実施記録」としている。A・Bグループでは、9年間を通した教育目標や作成・活用している小中一貫カリキュラムを記述できるようにしている。また、両グループにおいて「評価指標と結果の経年比」が記述できるようにしたいと考えている。

③事例紹介方法の検討も行っていく。情報収集は先ほどの各中学校区から提出される「実施記録」や小中一貫教育推進サポーターの巡回により行っていく。好事例については、数点を経年でデータベース化してグループウェアキャビネットに保存し、先生方がいつでも見ることができるようになりたいと考えている。

④の各種助言・支援については、小中一貫教育推進サポーターによる助言や支援、巡回による情報収集及び情報提供をこれまで通り行っていきたいと思う。また、小中一貫教育や幼小中連携の担当者向けの相談会を実施したいと考えている（希望者のみ）。具体的には、ZOOMやTeamsによるオンライン形式で、夏休みや冬休みなどの長期休暇中に勤務時間内で実施し、先生方の負担が少ない形で行いたいと考えている。

昨年度までの「小中一貫教育及び小中連携教育に関する調査」において、「保護者や地域への情報発信」が課題となっていた。対策として、今年度に入り、熊本市のホームページの活用や、各学校のホームページの活用を図っているところである。まずは熊本市のホームページに「本市の幼小中連携及び小中一貫教育の推進・充実について」を掲載し、本懇談会のページともリンクを設定したものを新たに作成した。さらに、市民向けの広報誌を定期的に掲載し、情報発信に加え、アーカイブとしての利用もできるようなページを作成したいと考えている。また、5月の幼小中連携担当者会では、学校のホームページの好事例を紹介しながら、「小中一貫教育」や「幼小中連携」に関する「タブ設定」をしていただくようお願いしたところである。今後は進捗状況の把握と学校へのお願いを継続的にしていく予定である。

このあとは意見交換になる。岡村座長からも説明があったが、今年度の懇談会の目標は「小中一貫教育及び幼小中連携教育について、これから各学校が主体的に取組を進めていくためにどのような仕組みを整えればよいのか」となっている。

本日は事務局からの提案内容に対して委員の方々の忌憚のないご意見を

	いただければと思う。事務局の説明は以上である。 5（3）意見交換 それでは意見交換に移る。先ほど事務局から今後学校が自走していくための次年度以降の取組案として、①から④まで提案をしていただいた。それに関して、委員の方々からご意見をいただきたい。その際に学校内で今このようなことに困っている、この取組がうまくいっている、そういった内容も一緒にお伝えいただければと思う。 私から②の実施記録に関して確認だが、現時点では実物はまだできていなくて第2回の懇談会までに作成するということでよいか。
岡村座長	
坂本指導主事	そうである。一応項目を挙げてみたが、項目が多いとか、逆にこういった項目を入れないなどをお聞きして、第2回で実物を出せたらよいと考えている。
藤枝委員 (市PTA協議会)	この実施記録は、今まで使用しているものか。
坂本指導主事	6月と11月と1月に幼小中連携の日を設けているので、各中学校区の実施内容を記録してもらい2月に教育委員会へ出してもらっている。教育委員会としても、実施状況を把握することに役立てているが、これから学校が自走していくためには、幼小中連携の日のことだけではなく、年間としての取組を記録できるような様式に変えた方がよいのではないかと考えている。
藤枝委員	この実施記録について、学校の先生方は他の校区の内容を見ることができるのか。
坂本指導主事	提出するところがネット上にあり、各校区のファイルは同じ場所に保存されているが、見てもよいという案内はしていない。他の校区の取組をいつでも参考にできるようなデータベースがあればよいというのが③の提案である。
藤枝委員	先生方はそういうのがあると助かるのではないか。
坂本指導主事	その年度の取組の好事例を何点かまとめて、学校からいつでも見ることができるようにしたい。
藤枝委員	小中一貫教育や幼小中連携の担当者がいるという説明だったが、これは各学校で置かれているのか。
坂本指導主事	各学校に小中一貫教育もしくは幼小中連携の担当者が一人は置かれている。
藤枝委員	どのような基準で担当の先生が決まるのか。
坂本指導主事	年度の初めに先生方の仕事の割り振りがあるが、その中の1つとして決まっていく場合が多い。初めて担当者になる先生も多く、私も初めて担当者になった時に何をすればよいのかわからなかったなので、①の提案で説明し

	た手引書のようなものがあると助かると考えた。例えば6月に「幼小中連携の日」の第1回目があるので、それまでに取り組む内容の説明などが書いてあるとよいのではないか。分厚い小中一貫教育などの本は、4月の忙しい時期に読む人はあまりいない。少し眺めるだけで概要がわかるようなものがあればよい。
藤 枝 委 員	他の学校がどんなことをされてるかという情報が見れば、担当者は考えやすいのではないか。
坂本指導主事	その通りで、ゼロから考えることはとても大変なことであり、当たり外れもある。具体的な例の中から、自分の校区に合うようなものを選択するというのはすぐにできる。
藤 枝 委 員	広報誌には映像や写真もあるとわかりやすいのではないか。
坂本指導主事	広報誌のイメージとしては、保護者や地域の方、市民向けを考えている。ただ、先生方にはそれでは情報不足だと思うので、別にデータベースを準備したいと考えているところである。
藤 枝 委 員	これをもつての実施記録ということか。
坂本指導主事	そうである。その中からよい事例があれば保護者向けや先生向けへの情報提供ができる。現在は「つなぐ」を、ホームページに載せていないので、「つなぐ」を広報誌としていくのか、また別の広報誌を作成するかについては検討中である。
藤 枝 委 員	これまでこんな情報が欲しかったというのではないのか。
坂本指導主事	「幼小中連携の日」に取り組んだことや小中一貫カリキュラムと幼小中連カリキュラムの進捗状況は把握しておきたい。幼小中連携のカリキュラムについては、42 中学校区のうち 39 校区は幼稚園まで入れたカリキュラムが完成している。残り 3 中学校区も今年度取りかかっているので、近いうちに 100 パーセントになると考えている。
藤 枝 委 員	事務局としては欲しい情報は今のところ網羅してるという感じか。
坂本指導主事	私たちが欲しい情報とは別で、校長先生方、教頭先生方の視点からこのような中身を入れていかないと取組が繋がっていかないという意見があれば教えていただきたい。また、保護者の方からもうこういうのがあると先生方が頑張れるんじゃないかというような意見があれば教えていただきたい。
藤 枝 委 員	この実施記録はここにいる先生方は書かれたことはあるのか。
坂本指導主事	基本的には担当者が書いて教頭先生や校長先生方がチェックという形になる。今後、この様式自体がその校区に応じたものになっていかないとはいえないと思っているが、最初からその段階に行くと混乱するので、まずは A・B グループと C グループで様式を分けた上で進めていきたい。ゆくゆくは、「枠があると書きにくい。」と言ってもらった時が、本物になった状況だと思っている。

坂 本 委 員 (天明中校長)	昨年に引き続き会議に参加しているが、小中学生の交流と教員同士の交流についてお話をさせていただく。今後どう自走していくかということだが、昨年度までは美術と音楽で小学校への乗り入れ授業を2、3学期を中心に実施できた。4小学校の先生たちと中学校の先生たちで、総合的な学習の時間のカリキュラムをつくっていく中で、こどもたちが交流する場面ができないかということでカリキュラムづくりを行った。天明校区は令和9年から義務教育学校になるので、生活のきまりや校則について中学校の校則を参考にしながら4小学校で統一を昨年度したところである。 今年度は中学校の総合的な学習の時間で地域課題について取り組んでいる。地域のまちづくりセンターから来ていただき、地域にはどんな課題があるのかという説明を受け、地域の空き家問題、天明の自然環境の問題、地域のそれぞれ校区にある色々な施設についての利用を促進する取組などについて学習を進めている。9月の29日に校区の小学6年生が中学校に来て取組についての発表やワークショップを小学生と行う予定である。そこにどのような価値付けや意味付けがあるかという、1つは中1ギャップの緩和がある。早いうちに中学校の先輩と交流することで、「先輩たちが優しいな。」といったことを感じながら交流ができる。また、今年から始めたのは小学校での職場体験活動（ナイストライ）。小学1年生や2年生に中学生が授業を教えるという内容で小学校にお願いした。乗り入れ授業については今年度も引き続き取り組んでいる。校区の小学校から中学生が挨拶をよくするという、「なぜ中学生はきちんと挨拶をするのかについて取材に来たい。」と校長先生に言われ、ある生徒の動画を撮られて小学校の集会の時に流された。なぜ挨拶をするのかというのを通して小学校と中学校の交流ができた例である。 自走するための課題として、天明中校区には4つの小学校があり、交流するとき銭塘小と奥古閑小は歩いて来れる距離だが、中緑小や川口小は歩いては来れない。そのため自走するためには予算化が必要だと考える。先生たちの交流の時の出張旅費等は確保できるが、小学生が天明中へ行く場合や、小学校間の交流で移動をする場合に距離が遠い。今のところ川口小学校は乗り合いタクシーを使っている。中緑小は保護者が送迎している。したがって自走するためには、どんな活動でもそうなるが、やはり人件費と予算化が必要である。今日この会議に来る前に校区の校長先生たちと少し話をきて、この会議でどのようなことを話してほしいかということ聞き取りしてきたが、こどもたちが交流するための予算、小中一貫教育で自由に使える予算が必要だということを書いてほしいということだった。
岡 村 座 長	特にAグループで隣同士に学校がある芳野や富合などは違うと思うが、そうでない場合にこども同士の交流をしようとした時にどうやって安全にその場まで集まってくるのかという問題など、それ以外でも実際どのような交流をするかを考えて予算化しておくことはやはり必要であり、当然、この話になると教育委員会事務局の皆さんも苦しい部分もあるかと思うが、現場からの声として貴重なご意見だった。 坂本先生以外は新しく委員になられた先生方なので、率直なご感想でも結構である。ご感想や先生方が幼小中連携や小中一貫教育に取り組まれていく中で課題など、今感じておられること等々、共有していただければと思う。
武 藤 委 員 (芳野中校長)	職員同士で話をしているのは、持続可能な形を模索しながら少しずつバージョンアップさせていくということである。おそらく多くの学校もされて

長)	と思うが、研究主任同士で打ち合わせをして、研究テーマを小中で統一させたりとか、小学校で授業研究会をするときは中学校に案内があり、中学校で行う時も小学校に案内をしたりしている。また、ゲームやインターネット、SNS などの課題は小学生、中学生にもあるので、養護教諭同士でも蜜に連絡を取りながら、夏休み直前に小中でアウトメディアチャレンジという取組をした。あとは運動会を一緒にしたり、「先輩先生」という取組があり、算数が非常に苦手な子どもが多いという地域の課題があるので、中学生が小学生に算数を教えたりしている。子どもたちがしたいことがある時には小中の代表が集まって「こども会議」を開くが、どうしても時間調整が難しい。小学校は 45 分授業なので、中学校に出かける時にはどの時間帯に設定するのか、すり合わせが必要である。
沖 田 委 員 (出水中校長)	出水中学校は 4 つの小学校から入学をして来る。その 4 つの小学校のうちの 3 つは、他の中学校にも入学するような小学校であるので、出水中学校が独自の動きをするとなると、今度はその他の中学校もそれに合わせて動いていただくこととなるので、何をするにあたっても足並みを揃えることが難しい。一斉に取り組むことが難しいのが C グループの特徴である。 そのような中、本校が今大事にしているのが、すぐ近くにある支援学校や高校との交流である。支援学校に関しては、出水南小が長い期間交流されている。それを受けて出水中でも出水南小の取組を引き継いで、他の小学校からの子どもたちも一緒になって取組をしている。これが今無理なくできている取組である。支援学校の障害があるお子さんに対して少し距離感がある子どもも、出水南小の子どもたちはとても近いので、それを見ながら接し方を学ぶことができる。もう 1 つは、小学校と中学校の PTA の仲がよい。頻繁に集まりがあっていて、小学校の PTA の方から、「ぜひ中学生のこういうところを小学生に見せたい。」というような要望が上がってくる。保護者の方の生の声を感じている。全てを叶えることはできないが、PTA の方々のアイデアやご意見も小中の連携でいかせればと思っている。
岡 村 座 長	小学校で取り組んでいることを中学校でもというのは、実際に小学校が支援学校と交流しているところに中学生も行くということか。
沖 田 委 員	それとは別に例えば文化発表会の時に一緒に出し物をすることや、その準備のために事前に支援学校へ訪問するなどの取組をしている。
岡 村 座 長	小学校が活動している日に中学校が一緒に行くようなことは難しいか。
沖 田 委 員	小学校と時間を合わせることや中学校の人数が多いので難しい部分がある。本来は小学校も中学校も一緒に活動することが理想だが、もしかすると人数が多いので時間よりも場所の確保が大変かもしれない。
岡 村 座 長	C グループのやり方として、どこかの小学校でやっていて、中学生にも引き続き系統性を持って学習させたいことを入れていくというのは、とてもシンプルでやりやすい取組だと感じた。
水 本 委 員 (富合小学校長)	先ほど事務局から提案があったが、各学校が自走していくためにということで、手引書の作成や事例の紹介等は非常にありがたいことだと思う。課題として、小中一貫教育には取り組んでいるが、保護者の方々がどれだけそれを実感できているのかというところで、学校側と保護者とのギャップがまだあると思う。取組を続けていくと、取組自体が目的になってしまう

	うことがある。例えば交流活動などにおいても、「今度交流活動せんといかんね。」という話だけで、その交流活動でこどもたちをどう育てるのかということが置いていかれる。そういうところを熊本市の教職員が意識することが必要だと思う。富合は4月に小中合同の遠足をするが、富合小の児童数が増えて全員ではできないので、小1と小6が中学校に行って、中3と交流する。その状況を見ていて、小学生よりも中学3年生にとっても効果が高いと思っている。中3のこどもたちが小1の子を一生懸命お世話してくれる。こういった活動の中で、中3のこどもが自分の成長を感じ、自尊感情を高めることもできる、そういうねらいを職員がしっかりわかっていて仕組んでいかないといけない。来週は夏休みの学習交流会として、中学2年生が小学3年生に夏休みの宿題を教えに来てくれるが、それも何のためにするのかということをしかりもっておかないといけないと思っている。 小中一貫教育のメリットとして事務局から6点出されたが、私たちは「中1ギャップの解消」というものを最も大切にしながら取り組んでいる。最も効果があるのは乗り入れ授業である。小学6年生が、中学校の先生方から教えてもらい、不安がなくなっていくというのがとても大切で、富合の場合は、中学校から音楽と家庭科と図工に来ていただいて、小学校からは中学校の数学のT2として支援に行っている。非常に効果があると思っている。英語と外国語について提案だが、中学校には専科の先生がいて小学校にも高学年の専科がいる。それを上手に活用して小学校の専科の先生が中1ぐらいまでは教えることができるシステムができると、外国語についても中1ギャップの解消ができると思う。予算も関係してくるが、今後検討していただけるとありがたい。
岡 村 座 長	新学習指導要領から小学3年生から外国語活動が始まって、そのこどもたちが中学生になってきているというタイミングで中学校の英語教育もまた1つ新しい場面を迎えるタイミングでもある。そういった意味でも乗り入れ授業についてぜひ検討していただければと思う。また、今話をしていたように、何のためにこの活動するのかということが何よりも大切になる。年を経っていくと何のためにではなく、何をするかだけが残っていく、1番最初に取り組んだときはすごく思いが強くて結果につながっていたものが、思いの部分がどんどん消えていって方法だけが継承されていき、最終的に形骸化したものだけが残っているということになるケースは、学校現場では枚挙にいとまがない。しかも、この形骸化しているものというのは、伝統化してしまってもめられないといったことをよく聞くので、何のためにこの活動をするのか、この小中一貫教育が形骸化しないための方法やどうやって思いを引き継いでいくかということに関しては、必ず検討しなければならない部分ではないかと思う。
片 山 委 員 (桜木東小学校長)	事務局から取組案が出されているが、これはこれで取り組んでいただければと思う。それに加えて私の方からの要望であるが、私は二岡中と託麻東小がモデル校の時に教頭を勤めており、その時1番困ったのが予算である。講師の先生を外部から年に2回、3回招くためには費用がかかる。担当者や職員のモチベーションを上げたり、取組をアップデートしたりしていくためには職員を県外の先進校に派遣し、そこでの学びをもち帰ってもらうなどの取組が大事だと思っていた。私がいた時は校長先生の考えもあり、他の予算を節約して職員を先進校に派遣していたので、小中一貫教育のためだけの予算措置をぜひお願いしたい。 先ほど出された外国語専科について、桜木東小学校は隣に桜木小学校が

	あるが、ここ数年、桜木小学校の外国語専科の先生が本校にも来ていただいていた。2つの小学校で同じような指導内容で子どもたちが桜木中学校に進学していく。この流れがとてもスムーズだったが、今年度、桜木小学校の外国語専科の先生が本校に来ていただくことができなくなり、本校の職員がとても困っている。ここ数年間ずっと専科が入っていたので、外国語を教えたことがない先生もあり、9月に去年まで来ていただいた外国語専科の先生をうちの学校に招いて、1クラス授業していただいて、その授業の様子を全職員で見て外国語の授業のやり方などを学び、授業実践につなげることで、子どもたちを同じ状態にして桜木中に送ろうということも考えている。中学校の先生からも、小学校から上がってきた時に、外国語専科の先生が教えているのとそうでないのでいくと、かなり学力的にも差があり、かえって外国語嫌いをつくっているというのも聞くので、せめて校区の小中一貫教育に取り組んでいるところであれば、同じ外国語専科の先生を派遣していただく方が、子どもたちのためにはよいと思うので、桜木中校区に外国語専科を派遣していただきたい。 これから先はコミュニティスクールが増えていくのではないかなと思っている。コミュニティスクールを中学校単位でつくっていただき、学校運営協議会で話し合いをしていくことによって、小中一貫教育がより進んでいくのではないかなと思う。
岡 村 座 長	少し話は変わるかもしれないが、外国語に関して最近よくイマージョン教育という言葉が使われる。イマージョン教育で気を付けなければいけないのが、学習者集団の語学力が同程度の方が成立しやすいということである。イマージョン教育というのは簡単に言うと、特定の教科を英語で教えるなど、英語に浸ることによって英語を学ぼうというスタイルだが、一般的には同一の語学力の学習者同士であれば、みんなが同じ困り感をもつ場面ができることで、みんなで頑張る状況が生まれる。その中で1人だけ既に英語ができる子がいても、実はその子にはあまり効果を発揮しないといったことがおきやすい。実は英語教育に関して、子どもたちが語学に慣れていくということは、他者とコミュニケーションを取りながらになるので、子どもたちのレベルが揃っているというのは結構重要なことになる。小中連携の考え方としても、それぞれの校区内の小学校の語学学習というものがある程度統一されているということは、間違いなく小中一貫教育には好影響があると言える。 コミュニティスクールに関しては、私が以前コミュニティスクールの運営委員をしていた自治体で、2小1中の小さな自治体ではあったが、全ての学校の会議に出る方がおられた。コミュニティスクールの運営委員のメンバーで、2小1中の3つのコミュニティスクールの会議に参加される地域の代表の方がおられた。要はそれぞれの小学校と中学校で出た議論をまとめたり、共有していただいたりするようなポジションになる。どこまでできるかという問題は当然あるが、それこそAグループ等であれば同じ地域なので、1つのコミュニティスクールの運営協議会でいくというのも大きな効果があるのではないかなと思う。今後検討できるとよい。
坂 元 委 員 (楠 小 教 頭)	小中一貫教育は、その校区の特色の推進や課題を解決するために取り組むという意義があると思う。本校では掃除についての課題があった。幼小中連携の日に中学校を参観した際、縦割り班掃除に取り組み、無言で黙々と掃除をする中学生の素晴らしい姿を見せていただいた。そこで、中学生の掃除を動画にまとめていただき、それを参考にしながら、2学期から縦割り班掃除を本校に取り入れた。最初は不安もあったが、縦割り班掃除の

	意義を全職員で話し合い、確認し、取り組み始めた。その結果、1年生から6年生まで1つの班で掃除をするので、6年生にリーダーシップの意識が芽生え、とても集中して掃除に取り組むようになった。3学期に楡木小の先生方が参観され、令和6年度から3校で縦割り班掃除に取り組むに至った。楠中校区ならではの1つの文化が出来上がったと感じている。 新たな展開として、幼小中連携の日の部会が事務部会や幼小部会といった範囲まで広がってきている。小中のこどもたちの交流は難しいところではあるが、中学生が制作した美術の作品を小学校で展示をしたり、逆に小学校の作品を中学校で展示したりする取組ができればよいと考えている。昨年度は本校で総合的な学習の時間に取り組んだことを、中学校にも協力していただいた。できることを考えながら地道に少しずつ進めているところである。 先ほど取組の目的は何なのかという話があったが、例えば幼小中連携カリキュラムや小中一貫カリキュラムを作成するにあたって、その校区の先生方が一生懸命考えて、中学校卒業時の姿をイメージして、話し合ってくださいっていると思う。でもそれが先生方の異動などによって形骸化しないように、私自身も本校区のカリキュラムを立ち止まってもう一度見直す必要性を感じたところである。
岡 村 座 長	そういう意味では人が入れ替わっていくのが公立学校なので、そこでの引継や見直しなど、色々なことを考えていかなければならない。一方で、楡木小が掃除を見に来て新しい取組が始まったのは、その校区ならではの好事例であり、こういったことをしっかり情報共有されていくような形をぜひつくっていただければと思う。
村 本 委 員 (向山幼稚園長)	小中一貫教育懇談会に幼稚園も呼んでいただいていたありがたいと思っている。私は小学校と中学校の教員で幼稚園勤務3年目となる。幼稚園に勤務し幼児教育の大切さを感じているので、幼小連携を進めていきたいと強く思っている。今日は夏休みの初日だが、うちはAグループで1小1中の校区で、江南中学校、向山小学校、向山幼稚園、みんなで人権の合同研修を行い、職員同士の交流の機会にもなった。自走していくために事務局から提案していただいた手立てというのもとてもよいと思ったが、私は自走するためには職員の先生方の意識を変える、そこしかないと思っている。担当者だけが十分理解するのではなく、こういう小中連携、幼小中連携をすることで「こんなにいいことができる。」「よし、やろうよ。」と先生方が思わない限り、私は進まない、自走しないと思う。うちの校区では、幼稚園の年長さんと小学生全員、中学生全員で合同遠足を行っている。担当の先生は大変だと思うが、なぜやるのかということを職員同士で理解をしたら、これは必要だということになると思う。中学校3年生が幼稚園の年長さんのお世話をしてくれるが、手を握った途端、一瞬で中学生の顔が変わる。幼稚園児も知らない中学生から手を繋がれて、最初はドキドキしてるが、優しい中学生、何でもしてくれる中学生を大好きとなり、1日楽しく過ごすことができた。それをする事でどんなことがあったかというと、年長さんは今度入ってきた年少さんに、ものすごく優しくした。自分たちがしてもらったのと同じように、とても優しくした。中学校の運動会がある時には、お世話になったお兄ちゃん、お姉ちゃんに「頑張れ」と伝えたくなり、ビデオメッセージを中学校に送った。1日だけの交流だったが、幼稚園にとっても学びが大きく、とてもありがたい機会だったということ先生方に伝えることで、「そんなにいいことがあるなら、今後も続けていきたいな。」となると思う。実は幼稚園側からするとその1日というのは、年

	長さんは何もしなくていいほど中学生にお世話になっている。保育士からすると安心安全な面では何も心配はいらないが、何でもしてもらっているの、こどもの学びにならないという気持ちもある。遠足後、年長さんが靴を履けない年少さんに靴を履かせてあげたりとか、靴下を履かせてあげたりする場面があった。幼稚園はその後どうするかというと、年長の担任とこどもたち同士で話し合う場面を設け、「年少さんにどうなってほしいのか」という話をする。「自分で履けるようになってほしい。」と年長さんが答える。「だったらどんな関わりが必要なの？」という質問をすると年長さんは考える。実はそういうことを遠足の後に幼稚園ではする。こういったことを幼小中の先生方で共有することで幼児教育について理解が深まり、自分たちがどのようにこどもに関わっていくのかということについてもしっかり考える機会になるので、自走していくためには職員の交流や話し合いがとても大事だと思っている。
岡 村 座 長	その通りで、先生方同士の意識が本当に大切になる。今、熊大附属小と附属幼稚園の幼小連携の生活科の授業に定期的に参加させていただいている。熊大附属小の1年生が附属幼稚園の年長さんのところに来て交流する生活科の授業の単元のお手伝いをさせていただいているが、それに取り組んだことがない人からするとイメージが湧かない。現地に行ってこどもたちの様子を見たら、先ほど話があったように次のステップとしてお世話されるだけでこどもたちが育つのかといった疑問も出てくるであろうし、そこをきっかけに今後は何をしていくのかというようなことも浮かんできく。やはり連携の中でこどもたちが関わっていくことによって、お互いがお互いにこども同士が育つ形はどういう在り方がよいか、当然、中学生は体の小さな園児を守ってあげたいという思いだったと思うが、それで本当によかったのかという風なことを考えれば、今度は中学生自身が、人が育つということはどういうことか考える機会にもなる。色々な形で何のためにするのか、これで本当によかったのか、といったことを考えていただく機会をつくっていただくのは本当に大切である、教育委員会として担当の先生方がスムーズに業務を進められるような仕組みづくりをすることは当然必要であるが、学校現場全体として、小中一貫教育を熊本市が打ち立てたということに対して、自分たちが行っていく教育をどういう風に小中一貫の中で行っていくかという意識を高めていくことが大切になると思うので、これについても色々な形で、どういう形で進めていけるのか検討していただければと思う。
中 釜 委 員 (P T A 協 議会)	保護者としては、小中一貫教育により中学校進学に対する不安感が軽減されるというのは安心できる点である。保護者がどのくらい知ってるのかという点は私も気になっている。保護者がどれくらい活動について知っているのか、私もわからないところもあるが、保護者が知っているということが先生たちに伝われば、先生たちもモチベーションが上がるのではないかと感じた。PTA のアイデアが連携にいかされているという話があったので、これまでは学校の取組に対して保護者が意見を言うのはどうなのかという思いがあったが、そういった意見も言ってもよいのかなと感じた。私のこどもは少し大人しいところがあって、中学校に上がるのに少し心配している部分があったので、こういった取組は保護者としても安心できるので、今後も進めていただきたい。
藤 枝 委 員	東町中学校はCグループで、去年この場に来るまで私は小中一貫校のことを知らなかった。そういった意味で知らない保護者もまだいると思う。

岡 村 座 長	それを広めるという面でもPTAという立場から広げていくこともできるのではないかなと思っている。先生たちが熱意をもって、自分たちの意識を変えてやっていこうというのであれば、保護者としても一緒にやっていける。 東町中では青少協と一緒に取り組んでいるイベントがあるが、それを毎年 11 月に行う。これまでは第二高校の吹奏楽部など、色々な団体を呼んでこちらから提供するようなイベントだったが、毎年少しずつ変わってきている。こどもたちが変化してきており、会議で生徒会のこどもたちと関わるが、そのこどもたちの中で「去年より盛り上げたい。」「自分たちの代だから絶対に盛り上げたい。」という思いが強くなってきている。いつも 7 月に会議を行うが、今年はついに生徒会から自分たちの主催にさせてほしいという提案があった。保護者や青少協などの主催の会であっても「自分たちのイベントなんだ。」という気持ちでこどもたちが新しい伝統をつくっていくのが目に見えてわかったので、私はすごく嬉しかった。こういった取組や伝統がずっとその学校にあるならば、違うところから異動で来られた先生方も、この学校はこういう風に繋がっているというのが目に見えてよいと思う。今は中学校だけの取組だが、お隣の小学校も巻き込んでイベントをやっていこうという感じにもなっていけるのではないかなと思っている。 それぞれの学校の先生方が色々な取り組みをされて、異動もされてそこでまた新しい取り組みをされてということで、少しずつ熊本市全体で多くの先生がこういったことに取組の意識を高く持ってくださいれば自走するということがおそらく成立していくと思うので、担当者だけがやるものではなくて、それぞれの先生方が思いをもって動いていただけるような形に、本当に自走できる形に持っていくために、皆様のご意見を参考にしながら事務局の方で色々案をつくっていただければと思う。それでは、意見交換終了として事務局にお返しする。
---------	--

6 事務連絡

7 閉会